

学 位 論 文 要 旨

氏 名 福原史子

題 目 保護者の待つ力を高める育児効力感向上プログラムの実践開発

保育実践において、子どもが夢中になって活動している間、しばらく待ったり、自己選択や自律的な問題解決を待ったりすることによって、達成感や満足感溢れる子どもの表情が観察されることは多い。こうした機会は、目標を達成する力、他者と協働する力等を含む社会情動的スキル（OECD, 2015）の育成の面からも重要と考えられる。OECDは、人生早期に獲得した社会情動的スキルが認知的スキルを含むその後のスキル獲得に影響を及ぼすと述べ、幼児期の教育の重要性を指摘している。このようなスキルを獲得する上で、園での保育のみならず、家庭教育の果たす役割は大きい。保護者には、子どもが自ら考えて取り組む活動を尊重して待ち、子どもの経験を保障することが求められる。しかしながら、これまで、待つことの重要性は実践知として語られることが多く、学術研究は僅少である。また、物や情報がすぐに手に入る現代社会においては、待つことが一層難しくなっており、待つこと自体が負担感や不安感の増幅にもつながりかねない。そこで本研究では、保護者の待つ力に焦点を当てた育児効力感向上プログラム（以下、支援プログラム）の開発を目指した。具体的には、保護者の待つ力を高め、子育てへの自信や見通しがもてるよう、現状把握、支援の検討、実施及び評価等に関わる実践的、実証的研究を推進した。

本研究全体は4章構成である。第1章では、まず、主題である保護者が子どもを待つことについて、研究の範囲と位置付けを明確化した。子どもを「待つ」こと及び「育児効力感」に関する先行研究を概観した上で、研究の目的と内容構成を示し、定義付けを行い、用語を整理した。次に、本研究全体に関わる倫理的配慮について記すとともに、本研究の全体像、研究対象、及び分析方法を示した。さらに、保護者の待つ力と子どもの社会情動的スキル獲得との関係を探り、支援プログラムを開発するという、本研究の全体構成を説明した。

第2章では、保護者の待つ力と子どもの社会情動的スキルとの関係に着目し、量的・質的検討を行った。第1節では、社会情動的スキルの育成における保護者の待つことの重要性と研究の必要性について論考した。第2節では、幼稚園の保護者への質問紙調査を通して、「粘り強さ」「挑戦力」「意思表現力」等の育ちと保護者の待つ力との関係を量的に分析・検討した。また、待つことが困難な場面・状況を、記述式回答の計量テキスト分析により明らかにした。第3節では、半構造化インタビューで収集されたデータをSteps for Coding and Theorization (SCAT) により分析・検討した。その結果、登園前等の時間制限のある場面で待つことが、子どもの社会情動的スキルに関係すること、及び時間的・心理的余裕が待つことの可否に影響を与えることが明らかとなった。これらを基に、保護者の待つ力向上プロセスの仮説生成を行い、待つことへの「気付きと理解を促す支援」と「行動を促す支援」の必要性を導いた。

第3章では、支援プログラムの開発・実施・効果検証を行った。第1節では、第2章で生成された仮説に基づき、認知行動論的な技法を援用した、①保育参観、②気付きの分かち合い、③待つことに関する行動目標の設定、④行動目標の実施、⑤ワークシートによる振り返り、から成る支援プログラムを開発した。第2節では、幼稚園の保護者を対象に、支援プログラムの実施を試みた。第3節では、支援プログラムの効果を、参加群と統制群との比較において検証した。具体的には、実施前後と1か月半後の3時点で育児効力感及び待つ力等を問う質問紙調査を実施した。この際、参加群には、事後の時点で文書完成法による記述式回答を求めた。その結果、参加群において待つ力と育児効力感の有意な上昇と、効果の持続が確認された。一方、効果には個人差があり、記述式回答の検討から、場面を限定した実現可能な行動目標の設定が支援プログラムの実行性を高める鍵になることも示唆された。

第4章では、第1章から第3章までの研究成果を整理し、得られた知見を総括するとともに、支援プログラムの効果について考察を加え、研究の到達点及び今後の課題と展望を提示した。第1節では、保護者の待つ力が子どもの社会情動的スキル獲得に及ぼす効果について考察した。第2節では、支援プログラムを開発・実施・効果検証した結果を基に、支援プログラムによる待つ力と育児効力感の向上メカニズムを図示した。その上で、園が保護者に提供できる支援の可能性について論考した。第3節では、研究の総括的な考察を行い、本研究の到達点を述べた。最後に、①子どもの社会情動的スキルに関するデータの収集・分析の課題、②支援プログラムの開発・実施の課題、③効果検証の課題を整理し、社会的意義として④支援プログラムの適用可能性、及び⑤保育現場への寄与・貢献を加えた5点について今後の展望を述べた。